

第2部会

つに集めること、さらには超越的なものへの赴きを意味している。その直視の記述において、思惟が用いられているのは、意味なきことではない。三位一体、は三である独立自由な主体が、一なる完全な交流を実現している神の内的構造を示し、人間にも在るべきかたちを示す指標として機能する。しかし、第八巻は、直視の立場が全体的人間を三位一体から照射するどころか、心と身体という部分を別々に生きるAの分裂の事態を暴露する。そして、この暴露は、希求される全体的人間の成立へと逆転し、機能する。「ロゴスがサルクスになった」。それは、キリストが一つのペルソナのうちに二つの本性を生きていることを意味する。自己の一たることの実現の希求が、こうしてロゴスとサルクスの結合、すなわち、不可能の可能に転じる。翻れば、直視における枢要的記述、「あわただしき思惟によつて」が、つとにそれを用意していたともいえる。バルトはいふ。もしこちらとあちらのとの間にある深い裂け目がもともと埋められていないなら、どうしてわたしはわたしに真理の準備をしてくれる、無限の、甘い、苦い艱難を経験することができるのだろうか。しかし、ともにいわれる。神の存在とわれわれの存在の間の連続的な関連が生じるような、何ものも存在しない。ここにみられるのは、不可能の可能としての連続性である。このような観点から、バルトはAを連続性ゆえ批判する。たしかに、『告白』にみられる直視に、その批判を向けることは可能であるようにもみえた。しかし、その直視において枢要的機能を果たす思惟があわただしいものであったと記述されていることに留意し、それが「ロゴスがサルクスになった」への潜勢態

であることをみると、そこには不可能の可能に照射されてみずからの一であることを企てるAの回心を読み取ることができるのではないか。

進化における宗教の問題

滝澤 克彦

日本の宗教学において、宗教の進化ということが論じられなくなつて久しい。もちろん、社会科学全体においては、ドーキンスやスペルベルなどによつて提示された新たな進化論的枠組みのなかで宗教の問題は軽視できない主題として扱われてきている。それに対して、宗教研究では、宗教の進化は宗教史に向けられた特定の文脈に定置され、後には社会進化論と密接に結びつく形で独自の展開を示してきたが、このような意味での宗教進化論は現在ではほとんど省みられなくなっている。そのような流れは「宗教史」の一端に位置づけられ、脱構築の対象として、あるいはより素朴な意味での「批判的」歴史学に晒される限りで、存在価値を保っているかのようなのである。

宗教進化論への批判は、宗教を序列化することによる優劣などの価値判断の危険性に向けられてきた。また、その点こそ、脱構築が最も適切な形で近代性に引きつけて批判の効力を発揮するところである。この危険性は、その枠組みを問題としている以上、例えばアニミズムを美化することなどによっては排除

できない根深さを有している。それを承知した上で、なお価値中立的な進化の図式を模索しようとする努力は果たして可能かつ有意義なのだろうか。意義は、政治的な意図に沿わせたブラグマティックな宗教史の構成のうちにしかないのだろうか。

そのような判断へ向けた努力は、宗教の進化については放棄された。スペンサーの社会進化論とともに語らずに置くことが選ばれたのである。忘却によって問題は省みられなくなる。恐らく、宗教の進化という着想は、宗教の近代化という観念に置き換えられ、同じ難題が繰り返されることになった。世俗化や私事化といった問題が、依然として議論を引きつける部分があるとして、一方で、「進化論」としてのその難点は研究者を躊躇させる。しかし、あらゆる社会的動態を扱う研究は、進化論と同じ問題を孕んでいるため、この点は避けて通れない。かといって、もし社会的関心を放棄してしまうならば、現前する社会に学術的言説を通して介入するという、学問そのものの効果に対する評価も捨ててしまわなければならないだろう。そこで改めて「宗教の進化」に目を向ける必要性が認められる。

「宗教の進化」は、極めて多くのイメージを雑居させている。「宗教」を実体として捉えれば、そのまま「宗教」の進化は可能になるが、多くの場合、それは特定の教義や人々の観念の進化を意味していた。社会進化論と結びついた後では、社会進化におけるある側面が、それに該当していた。いずれにせよ、「宗教」という実体を想定しない限り、それは「進化」の内容に大きく依存することになる。特に、「宗教の進化」に関して、進化自体がなぜ起こるのかではなく、その順序と軌跡が専

ら議論の対象とされてきた。さらには、進化のメカニズム自体は生物学的な進化のアナロジーによって済まされてきたのである。そこで解釈が果たす役割が肥大化する。つまり、宗教の序列に関係する価値判断の問題はここに由来している。

社会の進化は、生物の進化に対する位置によっても区別される。二つの進化の分離は、社会進化における生物学的なアナロジーを介入しやすくするとともに、客観的科学の装いをもつ生物進化から切り離されることによって、実践的道德的ニュアンスを社会進化的な記述に付与する。この二つの帰結からも価値判断の性格が生まれてくる。

しかし、進化の概念におけるより重要な区別は、進化が一つの位相で生じるものか、新たな位相の創発を伴うものであるかという点にある。前者にはダーウィンが、後者にはベルクソンが属する。このような区別は、進化を語ることの実践的意味に帰結する。

「信」と「虚構」に関する理論的研究

——分析哲学を手がかりに——

谷内 悠

「宗教」という近代ヨーロッパ的概念をその複雑な歴史背景から切り離し得ないことは、非ヨーロッパ世界における「宗教」を学問的に取り扱う際に避け難いアポリアとなっている。